

奨学生レポート（最終）

オハイオ・埼玉スカラシップ事業平成22年度奨学生として、アメリカ・オハイオ州のフィンドレー大学に一年間留学させていただいた、伊藤里香と申します。

私は、この留学を通して、大学の授業で学んだことはもちろん、そのほかにも数え切れないほど様々なことを学びました。そこで、今回のレポートでは、人間として、また埼玉親善大使として学んだことに絞って報告し、最終レポートとしたいと考えます。

まず、人間として学んだことがあります。私は、**Habitat** というアメリカに本部がある、災害や貧困等で家がない人々のために家を建設する国際的な **NPO** 法人の大学支部に所属していました。ここで出会った友達から、何でも前向きに考えればことはよく進むこと、また他人とのいい関係を築くための「褒めあい」の大切さを学びました。彼らはとても心の温かい人々ばかりで、私の毎回の質問に対して全くいやな顔一つせずいつも共に行動してくれました。もちろん初めはなかなか英単語がみんなが発するようなテンポで出てこず、なかなか輪に入れませんでした。そんな状況にもかかわらず、ただいつも一緒にいようとする態度に、いらだちを覚えられるのではないかと迷った時もありました。しかし、来る前に決めた、「楽だからといっても、日本人社会に頼らず、アメリカ人社会に入って生活する」という目標を達成するべく、諦めず、できる限り彼らとともに行動することを試みました。その努力が実り、彼らと留学生と国内の学生との表面的な友達の域を超えた、自然な友達関係を築くことができました。

さらに、彼らから、人それぞれ、得意なこと・得意でないことがあるのはあたりまえであり、それを恥じて消極的になるのではなく、思い切ってやってみれば何かその都度、得るものがあることを学びました。たとえば私はゲームが嫌いでした。なぜなら大多数の人ができることでも、みんなについていけないことが多かったからです。しかし、彼らは私ができなくても、「じゃあ、もう一回やろう」「すごいね、勝ちだよ」と、私がいたくなくなるような雰囲気を作りませんでした。私は今まで嫌いだった様々なゲームを彼らと楽しむことができ、今まで「楽しいもの」としてとらえていなかったものが楽しく感じられるようになり、ほかの「嫌いなもの」に対する見方までも変えてくれました。

最後に、各休みごとに、遠くから来ている友達の実家に泊まらせてもらったり、日用品の買い出しから、複雑な内容の電話の代弁まで通常の生活に必要なことすべて、**Findlay** の友達に面倒を見てもらいました。振り返ってみると数えきれないほど多くの人々に支えられ、私の生活が成り立っていたことに気がきました。さらに、初めての一人暮らしは、両親、家族の存在の大きさを改めて感じさせてくれました。春学期の授業はとくに以下のように忙しく、私は家族によって支えられていたからこそ、いろんなことに挑戦できていたのだと思いました。

10:00-10:50	Writing		Writing		Writing
11:00-12:15		Human diversity		Human diversity	
13:00-13:50	Conflict resolution	Reading	Psychology (12:00-12:50) Conflict resolution		Conflict resolutions
14:00-15:15		Japanese culture		Japanese culture	
18:00-20:00	Film society	Entrepreneurship (18:30-21:15)	Film & society		

しかし、宿題・課外活動の準備・授業・ご飯の支度など、忙しい生活を通して、いかに効率的な時間の使い方をするかという練習ができ、意味のある忙しさでした。このように私の内的成長は確実に私の周りの人々によって作られたものだと言えるでしょう。



奨学生という立場からも学んだこともあります。この OSUS(Ohio Saitama University Scholarship)の学生としての毎月のレポート、一年間の振り返りを込めたオハイオ州の政府の方々の前でのプレゼンテーションの準備から、とても大切なことを学びました。それは、言葉にして他人に自分の経験・学びを伝えることは、自分自身の良かったこと・悪かったことの反省と将来への教訓につながるのだということです。これは今後どんなことにおいても言えることだと思います。経験をそのままにするのではなく、自主的に振り返ることによって次に良い結果を出すことができるということです。

また、姉妹州省の友好親善大使として様々なことに挑戦した経験は、一つのことに特化せず、常に複数の選択肢を持っていることは恥じることではないということを教えてくれました。この一年間、日本文化の紹介プレゼンテーション、ボランティアとイベン

トの企画・運営といった、様々な分野に関わってきました。たくさんのごに関わった分、たくさんの人と巡り会うことができました。「一刻も早くやりたいこと、一番向いていることを探さなければ」と焦っていた私に、もっと広い視野を持たせてくれたのが現地での様々な課外活動でした。特別である必要はない、様々なことに挑戦していることも十分誇れることなのだと学びました。

最後に、親善大使の役割の一つである、Ohio州民に日本文化を伝えるということをするために私ができることは、日本への関心を高め、実際に日本人社会にいったん入ってもらう決断を促すことだと知りました。私はアメリカに来る前、茶道、華道といった日本の伝統文化についてただイメージがあるだけで、やり方も歴史も何も知らず、アメリカの人に何一つ“日本文化”を教えることができないのではないかと不安に思っていました。しかし、この一年間の学生の立場でそこまで深い知識を必要とされたことはありませんでした。表面的な文化理解を促すには、私が過去日本で暮らしてきた知識と経験で十分ことは足りたのです。もっと深いレベルでの文化理解は、自分の馴染んだ文化から離れ、自分がコントロールできない状況下に身を置き、その中で生活していくことによってしか生まれないのです。これは私の経験から言えることです。私は渡航前からアメリカの文化、人々に大変興味があり、たくさんアメリカ人と日本で交流してきました。そのため、アメリカ人の生活もわかっているし、困ることはないだろうと考えていました。しかし、予想に反して様々な価値観の違いに突き当たりました。たとえば、すべてが車社会の Findlay において、散歩がてら 20 分離れたところまで買い物に行こうとすると、何を考えているのかと珍しいものを見るかのように見られたり、家族との予定よりも友達との予定が優先される日本社会は変わっていると言われたり、自分の価値観の違いに戸惑いを感じたことを今でも覚えています。このように、本には書かれていない、自分だけの、その世界に入って感じる違和感が表面的レベルを超えた異文化理解につながるのではないかと考えます。表面的文化理解を越えてその文化と関わるためには、その違和感を何らかの形でその土地で解決しなければなりません。私の場合は自分の違和感を言葉にして友達に伝えました。そうすることによって、異文化を理解しただけではなく、どのようにして共存していけばいいのかを見つけることができたのです。この教訓はこれからの国際社会を生き抜いていくためにも必要なスキルだと考えます。さらに、奨学生としてこの留学をしていなかったら、ここまで分析することはなかったのではないかと思います。

・ハウスメイト



・日本文化紹介プレゼンテーション



・州知事訪問



奨学生として、また、親善大使としてのすべての仕事には、苦勞以上の、目には見えない報酬があったと考えます。私は今までこれほどにも心から人に感謝したことはありませんでした。私はいつも自分の成果を人に認めてもらいたくて、自分の成果は自分だけのものかのように扱っていました。ですから、心のどこかで自分でやった成果なのだから、私はだれにも感謝する必要などないと考えていたのです。そんな私を変えてくれたのがこの一年間の留学でした。様々な分野の人から、経験から、近い将来また同じ状況に陥ったら、今度からはこうしてみようというヒントを得ました。私はまだまだ経験不足で、人に何かを教えられるような立場ではないかもしれませんが。しかし、何事も小さい規模から始めるべきなのです。いきなり大きいことをやってのける人は、とてもまれです。少なくとも私はその数パーセントの人口には入りません。しかし、私の Findlay での経験はだれかに良い影響を与えられるかもしれないと信じ、ここでの経験をできるだけ多くの人に伝えたいと考えています。これが私の 2010-2011 年度奨学生としての今後の目標です。最後に、私を奨学生として選んでいただいた皆様、このプログラムを支えてくださった埼玉県の皆さま、Findlay でお世話になった方々、こんなにも素晴らしい機会を与えてくださり、本当にありがとうございました。